

救いへの道のり「4段階」

The four steps to salvation



1 番目の段階（自分が罪人であると自覚し認める）

ローマ人への手紙 3 章 2 3 節 すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず

これは救いの道のりで考えれば、救いへの出発点に立っていることに似ています。今まで宗教と神様、または罪や死、死後のことなどを、全く気にしたこともない人が、ある時からそれについて気になり始めるのです。これがイエス様との出会いの出発点です。

上記の聖句には、どのくらいの人が罪を犯したと書かれていますか。半分ですか、それとも 80% の人ですか。いいえ、ここには 100% の人、つまりすべての人が罪を犯したと書かれています。1 人も例外はありません。いくら善良な人のように見えても、偉い人のように見えても、素晴らしい先生のように見えても、すべての人が罪人だという話です。そしてその罪によって、人間は神様から断絶され、その神による栄光、例えば恵み、祝福、満足、平安、真の救いや永遠のいのちのようなものを受けることができず、苦しむようになるということです。人間のもがきは、ここから始まるのです。

この話になると、心から罪っていったい何なのかという、疑問が生まれるのではないのでしょうか。それではまずはじめに、罪の概念から考えてみましょう。一般に罪とは、外側に現れた犯罪というイメージが、強いかもしれません。警察や裁判にかかるようなことを、思い浮かぶのではないのでしょうか。つまり行動や証拠が見えて、初めて罪が確定されるということです。

これに対し、聖書で言う罪（SIN）の概念は、もっと広い意味を持っています。外側に現れた見える罪はもちろん、心の中の見えない罪までも、同じ罪として考えるのです。事実、内面の罪は原因であり、その結果として外側の罪が現れるからです。両者は分離できるものではなく、セットなのです。つまり、原因となる内面の道徳的な罪、良心の呵責（かしゃく）を感じるような罪まで、すべてが罪だということです。もちろん、内面の罪のうち、何パーセントが外側に出てくるかは、人によってそれぞれ違うでしょう。しかし、必ず内面の罪は外側に出てきます。人を殺して初めて罪になるわけではありません。殺す前に人を憎むことから罪ははじまります。殺人や窃盗だけが罪ではありません。このように、人間の心の中は、ねたみ、憎しみ、貪欲、淫欲、欺き、高ぶり、そしりといった数々の悪や罪が、絶えず入れ替わっ

ている、罪の巢なのです（マルコ 7:20-23）。それで聖書では、すべての人は悪や罪によって汚染されている、罪人だと言うのです。

また、罪は体の垢（あか）にも似ています。問題は体の垢は洗えばきれいになりますが、人の心や霊の垢である罪というものは、人間自ら洗い流せる方法がないということです。つまり、罪という垢は付いてくるばかりで、きれいにする方法がないので、人間にとっては一番厄介なものでしょう。

ところで、なぜ人々はこんな罪から離れることができないのでしょうか。それは、罪が2重性、つまり2つの顔を持っているからです。罪の一つの顔は、悲劇・破壊・滅びといった残忍性です。この世のすべての人間トラブル、戦争、殺人、けんか、憎しみなどの源は、人間の内面の罪なのです。もう一つの顔は、罪は楽しく面白くて、ロマンチックにも見えるため、人々が罪を愛するがゆえに、罪なしには生きられなくなってしまう、という面が罪にはあります。だから罪はなくなりません。

2番目の段階（罪は必ず厳しい代価と刑罰をもたらすことを認識する）

ヘブル人への手紙9章27節 そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように

2番目の段階は、救いの道のりで考えれば、救いの出発点に立っていた人間が、やっと救いに向かって一歩踏み出したことに似ています。死や死後のさばきなど、まったく気にしたことがない人が、なぜかそれらが気になり始めるのです。

上記の聖句には、人間にはすでに決まっている2つの出来事があると書かれています。一つは死ぬことであり、それは皆認めていることでしょう。もう一つは、死後さばきがあるということであり、さばきを通して刑罰を受けるようになるということです。それは、罪の結果として、必ず死と死後のさばきがあるという厳しい代価がついてくることを意味します。この話は、この世でも通じます。罪は決して自然となくなるとか、忘れられたらそれで終わるとか、死とともにきれいに消えるという

考えは、自己中心的な弁明であり甘い期待に過ぎないの
かもしれません。聖書はそれを強く否定しています。

先ほど、罪の2重性の中で、罪は残忍なものだと話
しました。罪は他人に残忍な苦しみを与えますが、それだ
けではなく、罪はその罪を犯した人にも残忍な姿で現れ
るのです。つまり、罪は後になって、さばきや刑罰、滅
び、地獄といった厳しい代価を伴って、自分に帰ってく
るということです。だから罪は怖く、ある意味徹底的に
正義だとも言えるのです。例えるなら、罪はまるで狩り
専門の犬に似ています。この犬は、一回ターゲットとな
る獣を見つけると、絶対逃すことがありません。必ず捕
まえて、殺して終わるのです。このような罪の残忍性を
知ることで、私たちは罪に対してもっと真剣になるのでは
ないかと思います。

にもかかわらず、なぜ人間は罪を犯し続け、その罪か
ら離れようとしませんか。それは、犯罪心理とも
言えますが、「私は絶対捕まらない。罪の代価など受け
ることはない」と思い込んでいるからです。たしかに、
この世ではたまに捕まらない完全犯罪があります。しか
し、神の前では、完全犯罪はありません。逃れる道はあ
りません。



さて、イエス様は人々に「狭い門から入りなさい（マタイの福音書 7 章 13）」と、言われました。この聖句によると、

この世には2種類の人間がいるということです。一つめは、イエス様がともにする狭い道、救いの行列に加わって歩んでいる人たちです。もう一つは、広い道に長蛇の列を作って歩いている人たちです。この道は救いも真のいのちもなく、彼らは永遠の滅びの絶壁に向かう死の行列です。この行列には悪魔と一緒に歩いています。そして人間がその道から離れることがないように、天使のように変装をし、人間をだまし誘惑しています。彼らは滅びの国の地獄にまで、人間を連れて行こうとしています。もともと、地獄は人間のためではなく、悪魔のさばきの場所でしたが、悪魔は自分たちだけではなく、人間をそこに道連れにするためにもがいているのです。

有名なクリスチャン学者で作家であるC・S・ルイスは、本の中でこのように話しています。「地獄に向かう道は傾斜がなく、表面は柔らかく凸凹や絶壁もなく歩き

やすい道である。多くの人はきょうもその滅びの道を気持ちよく歩いている」。この死の行列に付いていくと、想像もしていない時に、滅びの絶壁にぶつかってしまうようになるでしょう。あなたは、この死の行列、真のいのちがない行列から、いのちと救い、天国の行列に移らなければなりません。神様は、1人の例外もなく、救いの道に移ることを願っています。人間は自分でも知らないうちに、この滅びの道を歩んでいるのです。あなたの命が終わらないうちに、この滅びの列から、天国へのいのちの列に加わるようにしてください。

私たちは地獄とその刑罰に対し、あまりにも安易に考えている場合が多いです。聖書のルカの福音書16章で、イエス様は天国に入っているラザロと、ハデス(地獄)に送られた、ある金持ちの話をしています。金持ちは、想像を絶する苦しみの中、水一滴を切なく求めています。しかし、そこは完ぺきに断絶された場所であり、誰からも助けを受けることも、または自分から与えることもできません。そこは、希望も、逃げ口も、やり直せる機会もない滅びの国です。あるとするならば、希望の代わりに終わりのない絶望、機会の代わりに尽きない後悔、喜びの代わりに耐え難い苦痛、真の自由の代わりに永遠の拘束だけがあるのです。この話は今日を生きているあなたに聞かせる、ハデスの現場からのリアルな声です。

3 番目の段階（罪とその刑罰からの解決策となる、十字架のことを理解する）

ペテロの手紙第一3章18節 キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちが神のみもとに導くためでした。

この3番目の段階は、救いの道のりで考えると、約80から90パーセントのところまで来たとも言える、非常に大事な段階です。

人間は罪を犯してしまうと、神様から断絶されてしまいます。そうになると、人間は神様から来る多くの恵みや力、喜び、救いを失ってしまうのです。そこで、人間は自分でも知らないうちに、死や死後への恐れを感じたり、何らかの渴きを感じたり、心が満たされず虚しさや苦しみを感じたりします。そして、人間はこの問題を解決するために、自分なりに救いの道を求め、何らかの努力をするようになります。善行、寄付、宗教行為を通して救われようと、もがくようになります。哲学者でありクリスチャンであったパスカルは、このことから人間は弱い存在ですが、偉大だと話しています。

しかし、こういう努力をしたからといって、果たして人間の中から完全な救いの道を見いだすことができるでしょうか。先ほどの善行、寄付、宗教行為などが、果たして救いの道となれるでしょうか。聖書は、人間自らは完全な救いの道を作ることができない、と断言しています。一般的には良い行いによって、人間は救われると思う人が少なくありません。しかし、聖書は良い行いによっては救われない（エペソ 2:8-9）と教えています。良い行いは、救いの条件ではなく、救いの結果であり感謝の現れとしてみなし、強調しています。実は、良い行いによって成り立つ社会や家庭こそ、人間にとっては一番厳しい環境かもしれません。そこに救いはありません。というのは、人間は何か良いことをしたから認められるのではなく、それとは関係なく愛と赦しを経験することで、幸せを感じ、豊かな人生を生きようになるからです。良い行いができず、罪を犯し苦しむ人間に、再び良い行いをしなければ救われないとするならば、それ自体が矛盾です。それは、真の幸せや救い、癒しではなく、もっと厳しい重荷の強要に過ぎないのです。

結局人間の力では、救いの道を作ることができないという結論が出ました。そのため、聖書の神様は、罪とその罪によるさばきや刑罰から人間を救うために、自らが

救いの道を設けなければならなかったのです。前の1ペテロ3:18には、キリストが自分の罪のためではなく、悪い人々の罪を背負って、その人々の身代わりとなって、十字架の上で死んでくださったと書かれています。それにより、私の罪が赦され、滅びから永遠のいのちに、移ることができるようになったのです。その方は、あなたの罪のために死んでくださっただけでなく、また3日目に死から復活されたのです。つまり、死からよみがえったことは、イエス様は死に支配される人間ではなく、死をも支配される真の神、全知全能の神であるという証拠なのです。ですから、イエス様を信じる人々は、死で終わるのではなく、必ずキリストのようによみがえり、天国に入るようになるのです。これが永遠のいのちなのです。体が死んでも、なお生きることのできるいのちなのです。この世では、死はすべてのことを無力にする、圧倒的な力を持っています。しかし、キリストの復活は、この死をさらに無力にする、もっと圧倒的な究極の力なのです。

大事なことは、神様はあなたの罪からの赦しと救いのために、イエス・キリストを十字架にかけ、死なせたということです。つまり、この尊い代価をイエス様が払って、あなたが救われるようにしたということです。この

十字架のことを理解することは、救いにぐっと近づいたとも言えますが、しかしこれで救いが完成するわけではありません。最後は、このイエス・キリストを、自分の救い主として心に受け入れることで、あなたの信仰を表す必要があります。それによって、あなたはやっと救いに至るようになるでしょう。これについて、次のところで見てみましょう。

4 番目の段階（キリストを救い主として受け入れる）

ヨハネの福音書1章12節 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。

先ほど話したように、あなたの前には、イエス・キリストによる救いの道が準備されています。このキリストの十字架によって、あなたは滅びの行列から、いのちと天国の行列に移ることができるのです。あなたの行いを必要とするわけではありません。この救いは、神様からのプレゼントであり、タダで与えられる恵みなのです。

前述のヨハネの福音書1章12節には、この方（イエス様）を受け入れた人々には、神の子どもとなる特権が与えられると書かれています。それは、キリストが十字架の上で、あなたの罪を背負って死に、神との和解の道を開いてくださったからです。

ある日曜学校で、小さい子どもたちが、先生にいろいろな質問をしました。そして最後にある子どもが、意地悪な質問をしたのです。その子どもは「先生、どうすれば地獄に行けますか」と質問しました。先生はかなり困りました。しかし、その子は、非常にまじめに聞いていたのです。先生も、自分を困らせるためではないことが分かったので、真剣に考えました。しばらくたって、先生はやっと答えを出し、子どもに「あなたが何もしなければ地獄に行けるのよ」と答えました。確かに、人間は生きている間、信仰的な行動を起こさないと、滅びの行列からいのちの天国の行列に移ることができません。あなたが、死からいのちの列に移るためには、あなたの罪と刑罰からの、完全で唯一の解決策である十字架のイエス様を、あなたの救い主として心に受け入れる必要があります。そうすると、イエス様はあなたの心の中に入ってくださいます。あなたは神の子どもとなり、救われるのです。

ぜひ、この決断を通して、永遠のいのち、救いの行列に移ることをお勧めします。もしそういう気持ちのある方は、以下にある「イエス様を受け入れる祈り」をしましょう。今までの自分の人生での罪を告白し、悔い改めることを通して、この世からイエス様のほうに移る選択をしましょう。そういう気持ちをもって、以下の祈りに参加するようにしてください。もちろん、心の準備ができていない方は、次の機会にしてもよいので、無理する必要はありません。祈りたい方だけ、一番敬虔な姿を取り、真心をもって祈りましょう。次の内容をゆっくり読みながら祈ってください。

「イエス様を救い主として受け入れる祈り」

イエス様、私は罪人であることを知りました。

自分の罪を告白し、悔い改め、人生の方向を変えます。

私をあわれみ、その罪から赦してください。

今私の罪と刑罰に対する、完全な解決者となったイエス様を私の救い主として心にお迎えいたします。

どうぞ、私の心の中にお入りください。

そして私の人生をお導きください。

イエス様のみ名によって祈ります。アーメン

皆さんは、どういう選択をしたのでしょうか。イエス様を受け入れる祈りをされたならば、あなたはこの世でできる、最高の選択をしたと思います。本当におめでとうございます。イエス様は私たちが罪を悔い改め、ご自身を救い主として受け入れるならば、私たちの心の中に入れてくださると約束しています（ヨハネ黙示録 3:20）。そして私たちには、神様の子どもとなる特権が与えられるのです（上記のヨハネ 1:12）。それは、あなたが救われ、神様の家族となったという意味です。こうして生まれたばかりの信仰や永遠のいのちが、もっと豊かな実を結べるようにしましょう。近くに教会があれば礼拝に参加し、個人的に聖書通読や祈りなども始めてみましょう。きっとあなたの人生は、以前とは全く違う、豊かで希望があふれる人生に変わるでしょう。祝福を祈ります。

救いへの道のり「4段階」

〒812-0045 福岡市博多区東公園4-5

著 者 姜 錫在 (カン スツチェ)
JOY CHURCH 牧師

電 話 092(643)5534

E-mail joyskan@gmail.com